

感動

小野村 誠

翔太の携帯電話に着信音が流れた。聴きなれている曲である。翔太は卓上にある携帯電話を手にとると蓋を素早く開いた。翔太の三女、和佳子からだだった。

「お父さん、今度のお誕生日のお祝いだけど、劇場に招待したいの？ お父さんって忙しいでしょう。でもね、誕生日に近い日が良いのかなって、颯真と相談したのよ」

「この歳だから、誕生日だなんてちょっと恥ずかしいけれど、そうだなあ、和佳子に任せるから。お父さんは何時でもいいよ」

翔太が劇場に招待されるのはこれで八回目である。そのうち一度だけ、新宿コマ劇場に足を運んだ。孫の颯真が北島三郎《あばれ無法松》の新宿コマ劇場で敏雄役を演じるのだと教えられていた。歴史ある新宿コマ劇場が無くなるのだと報道されていた。無法松の一生の小説を読んでいた翔太は、男気のある松五郎が好きだった。岩下俊作が書き下ろし若き頃読んだ本だったが……、そんな気持ちでコマ劇場に入館した。幕があがると北島三郎演じる車夫の無法

松が敏雄を人力車に乗せて花道から登場する。その人力車に乗った孫の顔を見た翔太は、ちょっと驚いた。小説は何度も読んでいる。だから小説通りの演出なのかと、そんなことを考え観ていたからだ。それでも二千人もの大観衆の見守る中での颯真の演技。大ベテランに囲まれ、見事に敏雄役を演じきった。幕が下りたのを見計らい、翔太は楽屋に向かい共演者に挨拶を終えると孫に会い「演技、うまかったなあ。公演も続くから、身体に気をつけて」とその一言を言っ、第二部の北島三郎歌謡ショーを観ることなく帰宅した。あれから二年が過ぎていく。今度はミュージカルで、レ・ミゼラブルに出演するのだと和佳子が説明した。新宿コマ劇場を最後に翔太はこれまで六回、孫が出演する新しい舞台に誘われたがそのすべてを断っていた。だが今回はこれまでとは違っていた。千葉市内にある翔太の家に颯真が泊まりに来た時だった。「じい、新宿コマ劇場にきたじゃない。あれから何度も誘ったのに、ばあは来てくれているじゃない。どうして、じいは来てくれないの？」

翔太の背中を流しながら、訊いた。「じいって、カテーテル手術をしただろう。その影響なのかなあ、ちょっと体調がすぐれなかったからだよ」

鏡に映る颯真の顔を見ながら答え、「二年前と比べたら、舞台も慣れただろう？」

と翔太は己の言い訳に気づき、今後の舞台とテレビ出演

を改めて訊いた。

「うん、間もなく舞台稽古が始まるんだ！」

と翔太に言うと「じい、背中きれいになったよ。それにじい、健康になって、早く俺の舞台を観に来られるようになるといいなあ」

「背中流してくれたお礼に、今度行くよ」

その日、颯真と次回の公演を観ると約束した。それから二カ月後、帝国劇場の舞台で十月から十一月二十日まで公演すると和佳子は言っていた。その舞台で重要な役を演じる颯真が「じいに観てもらいたいんだ」と言って招待状を送ってきたのだ。日ごろから出無精の翔太の氣質を知っている三女和佳子。誕生日のお祝いにと、チケットと孫が出る役柄、劇の内容を詳しく書いて送ってきた。

翔太は高校生の時に、レ・ミゼラブルは何度か読んでいた。だから懐かしさも手伝い、孫との約束もあり足を運んだのだ。孫が演じるガブローシユはエポニーヌと姉弟。ジャンバルジャンがパンを盗み十数年間投獄される。多くの若者が腐敗した政権に革命を起こす。孫もその中の一人なのだ。と、和佳子の案内書には書かれていた。小説でもそんな内容だったと記憶しながら翔太は帝国劇場の指定された席に着いた。劇が始まると圧倒されるような場面の連続だった。

革命児の若者に交じった颯真は、舞台中央で声を張り上げ一人で歌い重要な役柄の演技を続けている。革命を起こし

た若い人達と共に戦い、命を奪われる。孫の亡骸が舞台中央を何度も回り続けているのだ。その姿を観た翔太は、胸に熱きものが沸き起こった。程なく、幕が下ろされた。ミュージカル恒例であり、大観衆が待ち望むカーテンコールの始まりだ。出演者全員が七回、大観衆のカーテンコールに応えた。翔太は六度目のカーテンコールに椅子から立ち上がり、中央で観衆に応えるわが孫に無意識のうちに拍手を送っていた。孫を見つめる翔太の目蓋から熱き涙が流れ落ちていた。

小学四年生の孫から、「じいの誕生日！俺もここまでがんばったよ」と黙して教えられた。その感動も大いにあったのだらう。翔太は楽屋には行かず、名刺の裏に「素晴らしい舞台、ありがとう。感動したよ。じい」

と書いて、その名刺を劇場の入り口受付の係人に渡し、楽屋に届けるように頼み、新しい感動を胸に有楽町駅から電車で千葉に向かっていた。